

## 東京慈恵会と渋沢栄一

社団法人・東京慈恵会は明治 40 年（1907）に結成された。そしてこの会は昭和 20 年（1945）、第二次世界大戦が終わるまで、約 40 年ちかく慈恵学園の真の主宰者であった。しかしどうした訳か、この会がどのような必要性で生まれたのか、またそれがどうして成功し続けられたのか、等についてはまだ語られたことがない。本小論の目的はそこに光をあてることである。

### 1. 東京慈恵会設立までの慈恵病院の経済基盤

高木兼寛（1849-1920）は 5 年間の英国留学を終えて帰国した（明治 13（1880）年 11 月）。高木は留学前に鹿児島医学校で英医ウィリス（W. Willis）に、さらに東京の海軍病院、海軍軍医学校（海軍軍医学舎）で英医アンダーソン（W. Anderson）に師事していたが、こんどは英国のセント・トーマス病院医学校（St. Thomas Hospital Medical School）で本場の医学を学んで帰ってきたのである。彼はその医学校を数々の優秀賞、名誉賞を受賞して卒業したのであるが、在学中からいつか日本に帰ったらこのような立派な病院（人間愛にもとづく貧しい庶民のための病院）と医学校をつくってみたいと考えていた。

彼が帰国して痛切に感じたのは、やはり医学界の風潮が多くの貧しい庶民に冷たいことであった。名医による立派な病院はできても、貧しい庶民のための病院はつくられないのである。

松山棟庵(1839-1919)が高木を訪ねたのは、高木が帰国したその年の暮れであった(高木の上司・戸塚文海が親交のあった松山を高木に紹介したのであろう)。松山はそれまでに、福沢諭吉と一緒に慶応義塾医学所(英語系医学校)やその診療所・尊生舎をつくっていたが、経済的理由でその年に破綻したばかりであった。鬱没としていた松山は高木を訪れ、英語系医学を基調にした医育、医療施設をもう一度何とか設立できないものか相談にきたのであった。

そのとき彼ら二人は、いま日本に広がっている人間疎外の医療をもっと温かみのある患者中心の医療に変革せねばならぬということで意見は完全に一致した。そしてこの現状を変革するには、まずその中核となる医学団体をつくり、そこでの意見を結集して医学施設(病院、医学校など)を創っていくのがより現実的であろうという結論にたっした。そして病院を設立するにしても、当時の社会状況から推してとうぜん慈善病院(施療病院)にするべきであろうということになった。

彼らは、さっそく医学団体の設立趣意書を作成し、これに賛同する同志(はじめ18名)を集めて、成医会なる医学団体を結成することができた(明治14年1月)。また同年2月には早々と慈善病院(施療病院)の設立趣意書を作成し、その翌3月の成医会例会にはさらに医学校・成医会講習所の設立を提案していった。まさに矢継ぎ早の行動であった。

### 有志共立東京病院——有志医師団の活躍——

病院の設立趣意書には次のような一節があった。「貧窮の大衆にあつては毎日の衣食を得るのが精一杯で、どのように摂生したらよいかを知らず、また病気で死ぬことを嫌ってもどのように加療したらよいかを知らないのであります。しかも多くは医薬を用いたくとも資力がなく、いたずらに父母妻子が病気に苦しむのを座視するしか方法がないのであります。

われわれが施療病院をつくりたいと思った理由はここにあります。このたび同志の者と相計り、各自が応力の拠金をなし、有志者の援助をうけて、一つの施療病院を設立し、いささかでも社会の欠陥を補いたいと思ったしだい

であります」。

この趣意書に賛同した戸塚文海ら 36 名はしばしば会合を重ね、まず高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦ら 8 名をその実現のための創立委員に任命し、また病院名はその成立由来からして有志共立東京病院 (Tokio Charity Hospital) とすることに決めた。

創立委員会はまず当然のことながら病院の運営を有志者の拠金によって賄うことに議決した。戸塚文海、高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦ら幹部は率先して各自 1,000 円を拠金し、さらにその他の有志者からも申し込みがあり、予約高は優に 2 万円をこえた。また資金のない賛同者は病院で役立つ日用品 (手拭、浴衣、枕、雑巾など) を数多く寄付した。

病院名、有志共立東京病院の“有志共立”というところは松山棟庵の発意だったように思われる。松山はすこし前に早矢仕有的と一緒にやはり同じ思想で横浜に横浜“共立”病院を創ったことがあり、その時の体験が大きく影響したと思われるからである。

横浜には戊辰戦争のさい一旦つくられた病院が暫くして東京に移ったため、この地に病院の建設を望む声が非常に強かった。先見の明がある早矢仕はこの熱望にこたえて有志者から基金を集めてこの横浜共立病院を創ったのである。その後病院は場所、名称を次々と変えたが、有志慈善家からの拠金で株式組織的に共同運営することには変わりがなかった。松山は早矢仕の懇請によって医官総擡という名目で参加したが、このときに受けた影響が大きかったと思われる (余談であるがこの病院は現在の横浜市立大学医学部に発展する)。

松山と早矢仕は、福沢諭吉塾 (慶応義塾) で英学、医学を学んだ頃からの親友であったが、松山が医学の道に進んだのにたいして、早矢仕は医学の他に (彼には一種の商才があったため) 商業の道に進んだ。当時はまだ小資本を集めてつくる株式会社というものがなかったが、早矢仕のつくった丸屋商店 (後の丸善) は、日本でもっとも早い時期の近代的株式会社であった。横浜共立病院も有志から資金を集め、株式組織的に共同経営する新しい形式の病院であった。彼は福沢諭吉によるエーランドの経済書講義 (The Elements

of Political Economy by F. Wayland) を聴いて感激し、自らも研究し、これを実行したといわれる。

先の有志共立東京病院の創立委員会は、院長に戸塚文海を、副院長に高木兼寛を、また医員には松山棟庵、隈川宗悦ら 6 名を委嘱した。また総裁には有栖川宮威仁親王殿下を奉戴することができた。病院施設としては当時経営不振に陥っていた東京府立病院（場所は現在の慈恵医科大学キャンパス）を譲り受けることにした。払い下げの代価は 2,462 円少々であった。

有志共立東京病院の診療は明治 15（1882）年 8 月から始められた。建坪 868.5 坪の病院は外来患者、入院患者で常時超満員で、医員たちは多忙をきわめた。来院者があまりに多いので、病院規則に「自今来院者ニシテ美服ヲ纏イ或ハ資力アルト認ムルモノハ拒絶スルコトアルベシ」なる項を追加するほどであった。初年度の年間外来患者は 862 名（1 名につき受療 39 日）、入院患者は 211 名（1 名につき滞在 42 日）であった。

明治 17 年 10 月、同病院は米国よりリード女史（M.E. Reade）を招き、看護婦教育を依頼し、また看護婦教育所の取締に任命した（これは日本での看護婦教育の嚆矢であった）。リードは以後 2 年あまりこの教育所において近代看護教育に専念した。この（有志共立東京病院）看護婦教育所の設立については、英国でナイチンゲールの業績に感銘していた高木の意向が大きく影響したと思われる。

有志共立東京病院は、いうまでもなく医療費が無料の慈善病院であったため、患者が増えれば増えるほど運営が困難になり、間もなく有志者からの更なる拠金が必要になった。高木らはふたたび次のような募金の檄文を発送した（1883 年 2 月）。「人に幸不幸あり、時に遇不遇あり、これまた天のしからしむるところ、貧にして病み、病んで療するあたわざる者を救うは、健康富裕の人、社会に尽くすの一義務たるを信ずるなり」。

これが反響を呼んで再びかなりの拠金（3,860 円）が集まり、皇室からもご下賜金（6,000 円）を賜わった。この拠金を出した人のなかに、本小論の主人公・渋沢栄一の名前がみえる（拠金 230 円）。渋沢は、この病院開設のごく初期のころから、このような医療事業には強い関心があった模様である。

この病院の開院いらいのほぼ5年間は、以上のように経営は有志医師団を中心に心ある善意の拠金によって支えられたわけであるが、この間の年平均収入はその他の拠金をまとめて約1万6千円であった（図2参照）。

### 東京慈恵医院（1）—— 婦人慈善会の活躍 ——

高木兼寛にはこの慈善病院を開院する始めから一つの不安があった。それは今後この病院を維持していく費用を恒久的にどのように捻出してゆくかということであった。そのつど上のように拠金を募るにしても限度があるからであった。

高木は、英国での経験から、慈善病院の運営は皇室の援助によるのが最も好ましいと考えていた。しかし実際にどのような手順でことを運んだらよいかは見当がつかなかった。可能性の一つは、当時鹿鳴館を舞台に活躍していた華族婦人に病院の後援組織をつくってもらい、機会をみてこの組織から皇族（皇后陛下）にはたらきかけてもらうことであった（これは以前から親交のあった伊藤博文伯爵からの示唆でもあった）。

幸い、この計画は伊藤（博文伯爵夫人）梅子、井上（馨伯爵夫人）武子、松方（正義伯爵夫人）満左子、大山（巖伯爵夫人）捨松ら（13名の委員）によってすすめられ、後援組織「婦人慈善会」が結成された（明治17年5月）。会の総長、副総長はそれぞれ有栖川宮熾仁親王妃董子殿下と同威仁親王妃慰子殿下であった（有栖川宮は宮家のなかで最も声望が高く、熾仁親王は幕末に尊攘派として活躍し、戊辰戦争では東征大総督として江戸に進撃したことで知られる。董子殿下は当時40歳、旧新発田藩主溝口正溥の七女であった。慰子殿下は20歳、旧加賀



写真1. 有栖川宮熾仁親王妃慰子殿下（1860-1923）

東京慈恵会総裁。慈恵病院の改革にもっとも熱心であった皇族（本文参照）。

藩主前田慶寧の四女であったが、大正天皇が誕生される前は威仁親王が皇太子に擬せられていたため、本来の東宮妃といわれていた)。

婦人慈善会が手始めに行ったのは鹿鳴館での慈善バザーであった。バザーは明治17年と翌18年の前後二回行われたが、いずれも大盛況で、とくに二回目には皇太后陛下、皇后陛下が行啓になり、同会の慈善病院にたいする活動に深い関心を示された。二回のバザーで得られた売上金1万5千円は同病院に寄付された。

しかし頻繁にこのような募金活動をおこなうわけにもいかず、そろそろ皇室の支援を仰ぐ時期になったようであった。戸塚文海院長、高木兼寛副院長は井上馨伯爵を通じて婦人慈善会に意見書をおくり、この病院を皇后陛下の御眷護のもとに置かれるよう依頼した(明治19(1886)年6月)。婦人慈善会としては熟議のうえ皇室へ上奏を行うことにし、伊藤梅子ほか29名の連署で、病院側の希望を記した上奏書を提出した。この上奏文の終りには高木の意向を示す次のような文章もあった。「西洋諸国では富める者の資金で慈善病院を建て、皇后または皇女を総裁にお迎えしていると聞いております。このような例に見習い、今後の施療制度の在り方をお考えいただきとう存じます」と。

この上奏にたいして皇后陛下より、上奏の主旨を嘉納する旨のご沙汰があった(つまり諒承された)。これによって明治20年4月1日より有志共立東京病院は大きく改組されることになった。まず病院名は以後、東京慈恵医院と改称し、皇后陛下を総裁に推戴すること、またその維持費は皇室の恩賜金と有志者の拠金によること、さらに婦人慈善会はこれを機会に東京慈恵医院会と称し病院と一体になることなどであった(本小論では、名称が紛らわしいので、この東京慈恵医院会を「東京慈恵医院婦人会」と仮称する)。婦人慈善会のときは華族の妻女が会員の中心であったが、改組されてからは広く民間有志の妻女も入会できるようになったため、会員数は十倍増し優に300名を越えることになった。

またこの改組によって東京慈恵医院の役員は、幹事長1名(皇室御息所より)、幹事10名(毎年更新。慈恵医院婦人会員より)が皇后陛下によって選

出され、商議医員 14 名、院長 1 名、次長 1 名は陛下の旨をもって有志医師の中から委嘱された。初年度の慈恵医院役員は次のようであった。

〔幹事長〕 有栖川宮熾仁親王妃董子殿下

〔幹事〕 公爵夫人毛利安子、伯爵夫人山県友子、伯爵夫人大山捨松ら慈恵医院婦人会員 10 名

〔商議医員〕 戸塚文海、長与専斎、石黒忠恵、三宅秀、松山棟庵、隈川宗悦ら 14 名

〔院長〕 高木兼寛

〔次長〕 実吉安純

〔医員〕 木村壮介、山本景行、河村豊州、三田村忠国、鈴木重道、木村順吉ら 16 名

こうして東京慈恵医院は明治 20 年 5 月 9 日をもって華々しく開院式を挙行した（招待紳士 23 人のなかに渋沢栄一の名前もみえる）。この時はじめて皇后陛下をお迎えすることになったが、以来、陛下には毎年一回、この病院に行啓され、親しく施療患者を見舞われることになった。病院にたいするご下賜金も少しずつ増額された。

旧婦人慈善会は上述のように華族婦人が中心の小さい組織であったが、東京慈恵医院婦人会に改組されてからは民間の会員が激増し、同会よりの拠金、寄付金も全収入の過半を占めるようになった。そして明治 20 年以降 9 年間の平均年収は 2 万 6 千円ほどになり、有志共立時代の 1.6 倍に上昇した（図 2 参照）。同じ期間の拠金者名簿をみると、有志者高額拠金者のなかに渋沢栄一の名前が、また慈恵医院婦人会の拠金者のなかに渋沢（栄一夫人）かね子、穂積歌子（栄一の長女）の名前が毎年みられるようになった。この病院にたいする渋沢家の関心が次第に大きくなってきた証であろう。

収入、資産に少し余裕ができたためか、明治 20 年ころから病院の増改築が盛んに行われた。一号病棟（130 坪）、二号病棟（130 坪）、三号病棟（167 坪）、看護婦宿舎（84 坪）、看護婦教育所（45 坪）などである。また高木院長が主宰する医学校もこの時期に、この慈恵医院の構内に転居し、その名も東京慈恵医院医学校（Tokio Charity Hospital Medical School）と改称された。こ

れで病院と医学校が表裏一体となったかたち、つまり高木がかつて学んだ St. Thomas Hospital Medical School と同じかたちになったわけである。

慈恵医院婦人会(もと婦人慈善会)と渋沢栄一とは、伊藤博文、井上馨ラインの欧化政策にたいしても同じ姿勢であつたらしい。次のような逸話がのこっている。

伊藤博文首相官邸でおこなわれた仮装舞踏会もその欧化政策の一つであつたが、楽しいあまりその目的を逸脱するむきもあつた(明治20年4月20日)。その夜の来会者はおおよそ3,4百名、その多くは慈恵医院婦人会員であつた。その仮装の例をみると、伊藤博文(ヴェネチア貴族)、同梅子(同貴族夫人)、その長女・生子(イタリア娘)、井上馨(三河万歳)、大山巖(薩摩武士)、同捨松(大原女)、渋沢栄一(山伏)、その次女・琴子(胡蝶)、高木兼寛(真宗僧侶)といった具合であつたが、会の結末はご多分にもれずかなりの乱痴気騒ぎになつたらしい。

この舞踏会の翌日は運悪く慈恵医院婦人会の総会であつたが、そのような訳で前日の疲れのため出席者がほとんどなく、会の幹部は困っていた。そこに現れたのが渋沢栄一であつた。彼は仮の司会の席につき、選挙をおこない総会会長を伊藤梅子に、副会長を高崎東京府知事夫人と渋沢(栄一夫人)かね子にして、一応形式的には会を済ませることができた(しかし実際はその後ある雑誌にはげしい批判文がでたためこの総会はやり直しになった)。

この話は渋沢栄一と慈恵医院婦人会との間柄をしめす資料として大変興味深い。

## 東京慈恵医院(2)——皇后陛下のご支援——

明治29(1896)年4月、東京慈恵医院の幹事長は、有栖川宮熾仁親王妃董子殿下から威仁親王妃慰子殿下(1864-1923。写真1)に交替された。交替後はそれまで毎年の更新制になっていた幹事を常置制にし、その代わり人数を10名から44名に増やした。この常置幹事のなかに渋沢栄一の長女・穂積歌子が選ばれた(夫の穂積陳重は東大法学部教授)。さらに明治39年には次女・



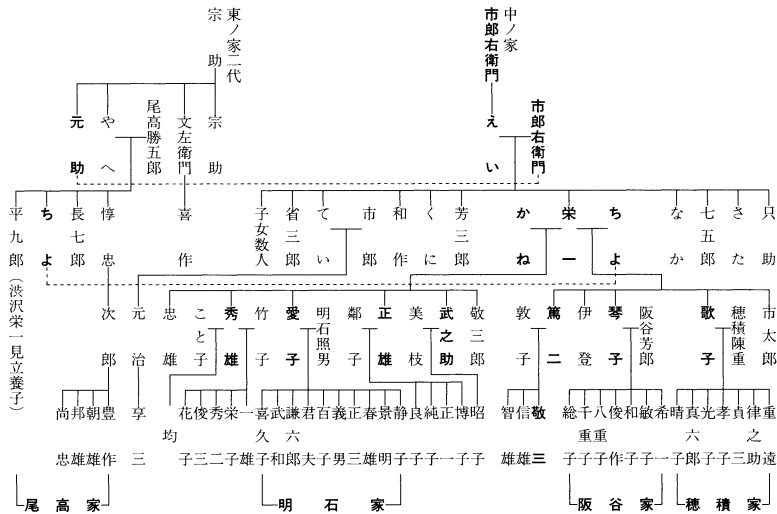


図1. 渋沢栄一とその家族  
 渋沢秀雄著「渋沢栄一」より引用。

阪谷琴子も同じく常置幹事に抜擢された（夫の阪谷芳郎は当時の西園寺内閣の蔵相であった）。渋沢栄一家の慈恵医院婦人会にたいする後援も年を追って熱心になり、夫人の渋沢かね子（拠金月額・5円，入会年・明治20年），娘の穂積歌子（3円，20年），阪谷琴子（2円，20年），嫁の渋沢敦子（2円，31年），孫の穂積光子（1円，39年）らが次々と婦人会員に加わった（栄一との関係は図1参照）。

このような新入会員がある一方で，全体的にみると会員数は次第に減少する傾向にあった。明治20年の改組当時は300名を越えていた会員も10年後の29年には200名ちょっとに減少していった。これに比例して会員による会費，拠金も減少していった。

幹事長・慰子殿下のご努力によって皇后よりのご下賜金は，始め（明治29年頃まで）3千円台であったものが32年からは7千円台に増額されて，この減少傾向はある程度防がれたが（ためにご下賜金の方が婦人会よりの入金よ

りもやや多くなるほどであった。804 頁の図 2 参照), しかしこのご下賜金もこれが限度らしくそれ以後 39 年まで増額されることはなかった。全体的にみて慈恵医院の運営は少しも楽にはなっていないのである。ただ図にみるように株の配当金がかかなりの収入になることは注目すべきことであった (それは九州鉄道会社などの株が主なものであった)。

このような医院運営の困難さにもかかわらず診療をもとめる患者は増える一方であった。医院側としては資金不足のため外来患者を制限せざるをえず、またベッド数にはまだ余裕があるにもかかわらず入院費が不足するためその半分ないし三分の一しか入院させることができなかった (ベッド数は当時 120 ばかりあったと思われるが、常時使えるのは 50 ベッド以下であった)。

とにかく患者からの収入が見込めない (施療病院である) 以上、何とか資産家の有志から今まで以上に資金を募るしか方法はなかった。

## 2. 慈恵医院幹事長・有栖川宮慰子殿下の発願

慰子殿下が幹事長であった明治 29 年から 39 年までの間は (図 2 の東京慈恵医院 (2)), また日清戦争から日露戦争までの期間であり、日本人の経済生活を大きく変えた時期でもあった。この間に日本の産業構造は手工業的な小工場を中心にしたものから工場制工業を主動力とするものへ変わっていった (つまり「産業革命」である)。

この間の著しい変化は、現象的には「商人」とよばれ低い地位しか与えられなかったブルジョアの地位が急速に高まったことであった。日清戦争直後、岩崎弥之助、同久弥 (三菱) および三井八郎右衛門の三人に男爵が授けられ、華族の一員に加えられた。また明治 33 年には渋沢栄一も同じく男爵に叙せられた。このことはブルジョアジーが正式に上流階級に仲間入りしたことを示す画期的な出来事であった。

慰子殿下は、このような社会構造の変化に連動したかたちで慈善事業・慈恵医院を発展させることはできないものかと考えられた。殿下が慈恵医院の拡張とその資産の充実についてとくに強く感じられたのは、明治 38 年にドイ

ツに旅行された時からであった（威仁親王とと一緒にドイツ皇太子のご婚儀に天皇、皇后のご名代として列席された）。その時いくつかの慈善病院を視察されたのであるが、その規模の大きさ、施設の立派さ、資金の潤沢さにおいて、とても慈恵医院の比でないことを痛感されたのであった。

帰国された殿下は、西欧の慈善病院の運営が一般にどのような仕組みになっているのか、とくにその資金はどのようにして調達されているのか、をもっと詳しく調査せねばならないと考えられた。

### 高木兼寛院長の欧米視察

幸いなことに高木兼寛院長は、日露戦争勝利の年（明治 38 年）、日本の軍陣医学とくに脚気病対策について米国コロンビア大学、英国セント・トーマス医学校などで特別講演を依頼されていたので、慰子殿下は、その機会を利用して欧米の医療状況とくに慈善病院の状況をとくに詳しく視察するよう高木に依頼された。高木の視察旅行は 7 か月にわたる長大なものであった。

視察後、高木から報告を聞かれた殿下は、慈恵医院の改革についての想いを一層強くされたようであった。実際に高木が報告した資料そのものは残っていないが、幸い北里柴三郎の依頼で東京医会で行なった高木の長大な報告講演「欧米視察談」の速記録が残っているので、その中から慈善事業に関係があるところをここに抜粋、引用する。

「米国では沢山の富豪が施療病院をどんどん造っているから、驚くほど多くの患者が施療病院に行く、患者を見るとなかなか貧乏人どころでない、毛皮の襟巻きなどをしているような者も大勢きている。これは沢山の富豪が惜しみもなく金を出すので、患者の方も何の制限もなく診療をうけることができるからである。むしろ開業医の方が患者がこなくて迷惑をこうむっているほどであるという。

これは米国だけでなく、ドイツのベルリンに参ったときにも、あるプロフェッソルから同じことを聞いたことがある。ベルリン市にはおおよそ 200 万人の人間がいるが、本当に受診のために金を払う者は 15 万人ほどしかないという。その他はすべて施療病院に行ってしまうというのである」。

「米国の大病院は金を惜し気なく使うから何れも立派なものである。建物の最下層には大抵大なる汽缶を設け、これによって病室を温め、さらに電動力をもって空気を送って換気を行っている。…しかし病院もあまり大きくなると問題も出てくるようで、ドイツのウィルヒョーを記念してつくった病院などは、5千人も収容できるということであるが、しかしこれなどは、あるプロフェッソルによると却って不便であり、むしろ5百人程度の病院をたくさん市内の各所に散在させた方が便利であると言うておった」。

「前にも云ったように、これだけの期間にこれだけの金が要ると決まれば、富豪はどんどん金をだすことになっている。米国のロックフェラーの例で云えば『これは人類のために必要である、ついでにこれを設けたいから金を出して貰えまいか』と云うたところが、その富豪は『それは尤もな話であるから、是非十分なことをさせてもらいたい。まず計画書を出してご覧なさい、それによって必要な金額がわかれば、その分お金をお渡し致そうという風で、これだけ金が要ると分かればそれだけの金がちゃんと出てくることになっているのである」。

高木の報告は以上のような調子であったと思われるが、これを聞かれた慰子殿下は、慈恵医院と欧米の医療事情とのあまりの違いに驚き、かつ何とかして病院の改革を進めねばならぬと、いっそう堅く覚悟を決められた。

### 慰子殿下の決断

殿下は早速（明治40（1907）年2月6日）、慈恵医院の役員（常置幹事、院長、次長、理事）を召集され、自分の決意を告げられ、次いで高木院長より欧米諸国の慈善事業の状況を陳述させられた。

次いで2月22日、殿下は威仁親王と一緒に慈恵医院を巡回され、越えて26日にふたたび常置幹事（18名）、院長、次長、一般婦人会員（75名）を有栖川宮邸に召集された（この召集に応じて前記の穂積歌子と阪谷琴子も幹事として出席している）。そして幹事、院長、次長にたいしては「序でながら、先日高木院長に案内されて院内を親しく巡見したが、その清潔なること治療上のことは行き届きおるよう見えたと、ただ建物は頗る不完全にして見苦

しき所も少なからず、病室の如きはなほ多数の患者を収容し得るにも拘わらず、資力なきため、これをなし兼ねるはまことに遺憾に覺えた」というお言葉があった。

さらに一般会員にたいしては「今やわが国の位置は日露戦争の結果、一躍列強の仲間に加わり、社会諸般の事業は非常な勢いをもって進みおるに拘わらず、独り慈善事業のみは発達遅々たるを感ずるは誠に遺憾である。現にこの慈恵医院にしても設立以来 20 年にもなるが、わずかに 4, 50 人程度の入院患者を収容できるに過ぎず、皇后を総裁に仰ぐ病院にしては如何にも規模狭小にして、慈善の趣旨よりするも、また世の進歩より見るも甚だ不本意なる故、如何様にもしてこの医院を拡張せんと希うこと切である。

自分は一昨年の洋行の折り、西欧の慈善病院の規模の大きいこと、設備の完全なることを見て、慈恵医院の拡張の必要を強く感じた次第であるが、自分の見聞はまだ不十分であるため、高木院長にその欧米巡遊の際に慈善病院の調査をするようにとくに依頼したのである。後で院長から詳細な説明があるはずである」というお言葉があった。

そして、高木院長の説明があつて後、一同立食の饗宴を受け、夕刻退出した。

### 3. 渋沢栄一の登場

#### —— 東京慈恵会の設立 ——

このようにして慰子殿下は、幹事、院長、次長、理事、一般婦人会員らに医院拡張のご決意を伝えられ協賛を得たわけであるが、実際に医院の改築、増築を行うにはそれこそ多額の資金を必要とするわけであり、それについては殿下はさらに一步を進めて広く実業家、華族の尽力を得んと思し召された。

殿下はまず婦人慈善会の頃から親交があった元老の伯爵井上馨と伯爵松方正義にその旨を伝えられ、それについての意見を求められた（明治 40 年 3 月）。しかし残念ながら両伯爵からはあまり良い返事はもらえなかった。「折角の思召しですが、目下株式は暴落し、市況不振の折りでありますので、こ

の計画は暫く自重され、延期なさっては如何でしょうか」というものであった。確かに明治 39 年に活発であった株価は翌 40 年早々から一変して暴落していたのである。

しかし殿下はこの井上、松方両伯の言葉に素直に従うことはできなかった。すぐに満洲に出張中であった夫・威仁親王殿下に長文の電報を打たれ、意見を求められた。威仁親王からは「政治家よりも直接実業家に相談すべし。実業家の或者を度々招き盡力を望むも一策なり」とのお返事があった。慰子殿下はここではっきり心を決し、幹事の穂積歌子（渋沢栄一の長女。穂積陳重夫人）と阪谷琴子（同次女。男爵阪谷芳郎夫人）の二人を招かれ、「一度お父上（男爵渋沢栄一）に、経済界の現状から推してこの計画をどのようにお考えになるか、問うてもらえまいか」と依頼された（明治 40（1907）年 4 月 5 日）。おそらく殿下は、慈恵医院開院以来、20 数年この医院を熱心に支援してきた渋沢栄一のことを想起されたに違いない。



写真 2. 渋沢栄一（1840-1931）

東京慈恵会副会長。東京慈恵会の設立に奔走し、設立後はその財務主任としてその発展に寄与した（本文参照）。

新潮社人名事典より。

渋沢栄一（1840-1931. 写真 2） 明治・大正期の大実業家。武蔵榛沢郡血洗島村の苗字帯刀を許された大庄屋の子。父から「論語」を学び終生の指針とする。江戸に出て一橋家に仕え、慶應 3（1867）年徳川昭武に随行して渡欧、西欧の近代的産業設備や経済制度を学ぶ。明治元（1868）年帰国、静岡に合本組織（株式会社の先駆）商法会所を設立。明治 2 年大蔵省に出仕、同 6 年辞職し、第一国立銀行を設立。また東京商法会議所、東京銀行集会所、東京手形交換所などを組織する。その他王子製紙、大阪紡績、東京瓦斯、日本鉄道など数多くの会社を設立、経営する。大正 5（1916）年実業界を引退。子爵。

穂積、阪谷両夫人は父・渋沢の言葉をもって参殿した。そしてその言葉はこのようなかなり好意的なものであった。「確かに株式の暴落、市況の不振は両伯爵の申される通りであります、しかしこの経済の現状が何時回復するという見込みもありません。殿下がせっかく思い立たれたわけありますから、とにかく一度やってみては如何でしょうか。たとい募金が所期の目的額に達しなくても延期するほどのことはないと思います。井上、松方両伯には、殿下より、渋沢はこのように申しているが、兩人とも何とか尽力してもらいたい、とお話しくだされば有り難いのですが」と。

殿下は、この渋沢の言葉を聞いて非常に喜ばれ、早速渋沢をお呼びになり「先日穂積、阪谷両夫人から貴方の返答を聞いて本当に満足でした。一度、井上、松方両伯を訪ねて談合してもらえないでしょうか」と丁重に依頼された。

事態は都合よく進展していった。渋沢の報告によると（明治40年4月14日）「井上、松方両伯とも殿下の思召しのことよく分かりました、十分尽力させていただきます。ついては実業家、財界人のうちとくに大倉喜八郎、原六郎、安田善次郎、早川千吉郎、近藤廉平、森村市左衛門を一度お招きになり殿下より親しくお話しになったらよろしいかと存じます」ということであった。

殿下は早速、渋沢、大倉、原、安田、早川、近藤の諸氏と高木院長をお招きになり、ご懇談なされた。そしてそこでもまた高木院長に欧米における慈善事業の状況を詳しく説明するよう依頼された。事は順序よくはこび、その席上で渋沢には「東京慈恵医院の相談役兼実業家団体募金委員長」の役を仰せつけられ、また早川千吉郎はその専務委員に、他の諸氏は全員委員に任命された。そして拡張後の医院は社団法人（東京慈恵会）の事業としての医療業務に当ることに決め、その手続きについては法学博士穂積陳重（東大法学部教授。渋沢栄一の娘婿）に草案の起草を依頼することにした。

渋沢はよく社会のために寄付もしたが、またそれを集める役もよく買って出た。

服部時計店の創始者・服部金太郎もいつも渋沢の勧誘で多額の寄

付金を出す人であった。その服部がある日あるクラブで将棋をさしていたところへ、渋沢が顔をだしてこう言った。

「いまイタリアの骨相学者にみてもらったら、私は百まで生きられるそうだ」。

とたんに服部は将棋をやめて立ち上がると

「そりゃ大変だ。渋沢さんに百まで生きられては、これから先どれだけ寄付金のご用があるか分からない。将棋どころの騒ぎじゃない。もっと稼がなくちゃ…」。

この冗談に一座は大笑いになったという。

殿下はさらに4月19、20の両日をつかって、今度は有力な華族、公爵徳川家達、侯爵徳川頼倫、侯爵浅野長勲、侯爵徳川義礼、侯爵鍋島直大、侯爵黒田長成、侯爵細川護立、侯爵伊達宗陳、侯爵池田仲博、侯爵徳川国順らと男爵渋沢栄一を招かれ、慈恵医院拡張の件につき出来る限り協力するよう依頼された。

こうして有力な実業家および華族の翼賛によって医院の拡張、改革の事業は経済的にも可能になり、明治40(1907)年7月19日、これら有力な人々よりなる社団法人・東京慈恵会がようやく発足することになった。そして皇后陛下のご沙汰により有栖川宮慰子殿下がその総裁を仰せつけられ、徳川家達が会長に、渋沢栄一が副会長に任命された(徳川家達は15代將軍徳川慶喜隠退のあと、徳川宗家を継いだ人である。彼の慈恵会会長はむしろ象徴的で、実際の運営は副会長の渋沢栄一が行ったものと思われる)。総裁より任命された役員、職員は次のようであった。

[会 長] 公爵徳川家達

[副 会 長] 男爵渋沢栄一

[顧 問] 侯爵松方正義、侯爵井上馨、侯爵桂太郎、男爵阪谷芳郎、伯爵香川敬三、穂積陳重、男爵岩崎弥之助、男爵岩崎久弥、男爵三井八郎右衛門

[理 事] 侯爵蜂須賀茂韶、侯爵徳川家達、侯爵鍋島直大、侯爵徳川頼倫、子爵実吉安純、長崎省吾、男爵高木兼寛、近藤廉平、男爵渋沢



栄一，大倉喜八郎，原六郎，森村市左衛門，早川千吉郎，安田善次郎

[評 議 員] 公爵夫人伊藤梅子，公爵夫人大山捨松，侯爵夫人松方満佐子，侯爵夫人井上武子，男爵夫人阪谷琴子，穂積歌子，男爵夫人渋沢かね子ら 67 名

[医 院 長] 男爵高木兼寛

[医院次長] 子爵実吉安純

[商議医員] 子爵橋本綱常，男爵石黒忠恵，男爵池田謙斎，大沢謙二，男爵岩佐純，三宅秀，男爵佐藤進，松山棟庵

[医 員] 日高昂，金杉英五郎，高木喜寛，樋口繁次，松山陽太郎，石川詢，野村虎長，石黒宇宙次，隈川基

こうして従来の東京慈恵医院は東京慈恵会医院に改称され，その運営は社団法人・東京慈恵会が行うことになった（しかし同会定款の〔目的〕に「貧困にして医薬を得る資力なき病者に施療する」とあるように，病院創設の思想は少しも変わることなく継承された）．同時に東京慈恵医院医学専門学校も東京慈恵会医院医学専門学校と改められ，東京慈恵会と病院と医学校の三位一体関係が確立され，この関係は終戦まで続いた．戦後は医学校は慈恵会から離れ，独立し，病院は同医学校の附属のかたちになった（昭和 22(1947)年）．そして有志共立東京病院看護婦教育所に由来する看護学校のみはそのまま慈恵会の運営するところとなった（昭和 32 年）．

#### 4. 東京慈恵会の設立による諸成果

渋沢の計画では，東京慈恵会が設立されたなら，なるべく早い時期に出来るだけ多くの資金を集め，それを配当率の良い株券か，利率の良い銀行預金にして，そこからの配当ないし利子によって病院経費をまかなうことであった．これは彼の経験，経歴からいって当然の考え方であった．

幸い，渋沢の勧誘で多くの有志者（約 70 名の資産家，華族）および正会員（約 900 名，慈恵医院婦人会の続きと考えてよい）からの拠金があつまり，初

年度だけでも払込人員 226 名、申し込み金額 33 万円余に達した（現在の価値はこれの約 1 万倍と考えると約 33 億円に相当する。高額である）。

ちなみに高額申し込み者には、三井八郎右衛門 3 万円、安田善次郎 3 万円、岩崎久弥 2 万円、前田利為 2 万円、古川虎之助 1 万 5 千円、藤田伝三郎 1 万 5 千円、渋沢栄一 1 万円、大倉喜八郎 1 万円、岩崎弥之助 1 万円、毛利元昭 1 万円、島津忠重 1 万円、戸塚文海 1 万円、貝島太助 1 万円、原六郎 5 千円、早川千吉郎 5 千円、近藤廉平 5 千円、森村市左衛門 3 千円らがいる（これだけでも 22 万円、つまり全体の 2/3 になる）。

また渋沢栄一家族の寄与も大きく、彼らの多くは後年まで毎月 1 円ないし 5 円をそれぞれの立場に応じて拠金している。記録に残っているものだけでも（大正 10 年まで）、渋沢かね子、穂積歌子、阪谷琴子、渋沢敦子、渋沢美枝子、渋沢鄰子、明石愛子、渋沢竹子、渋沢（元治夫人、穂積歌子の長女）孝子、穂積（重遠夫人）仲子、穂積（律之助夫人）季子、穂積光子、穂積（陳重の弟・八束の夫人）松子、阪谷（希一夫人）寿子、阪谷敏子、阪谷和子、阪

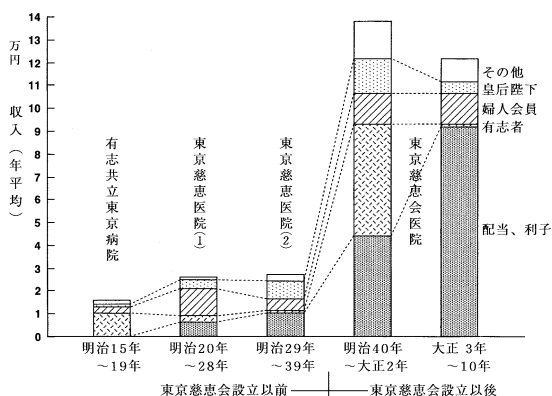


図2. 慈恵病院の各時期における収入の大きさとその内容の変遷

内容のうち「皇后陛下」とはその他の皇族、宮内庁からの寄付も含む。また「婦人会員」とは婦人慈善会員、東京慈恵医院婦人会員、東京慈恵会員を総称する。各時期によって「有志者」の構成も変わることは言うまでもない。この図は東京慈恵医院報告ならびに東京慈恵会医院報告の数値から作図した。

谷（俊作夫人）文子，阪谷千恵子，阪谷総子，渋沢（敬三夫人）登喜子らの名前が見える（渋沢栄一との関係は図1参照）。また栄一の嫡孫・渋沢敬三はのち慈恵会の役員をながくつとめた（昭和7年から理事，同20年副会長）。まさに渋沢一家はこぞって慈恵会を後援していた観があった。

さて東京慈恵会の設立の成果であるが，それは図2にみるようにまことに目覚ましいものであった。設立初年の明治40年から大正2年までの7年間を見ると，拠金その他による収入はまことに高額で，その平均年収は慈恵医院時代の優に5倍以上にも達した。有志者（資本家，華族）からの拠金をもっとも多額であり，会員からの拠金も（慈恵医院婦人会の300余名から900余名に増えたのに見合って）それまでの3倍以上になり，また皇室からのご下賜金も慈恵会設立を記念して大きく増額された。そして渋沢の期待した通り，株式の配当金や銀行預金の利子が全収入の大きな部分を占めるようになった（各種公債，鉄道会社などの株，諸銀行定期預金によるものである）。

さらに慈恵会設立7年後の大正3年から同10年までの8年間を見ると（図2），配当金，利子による収入の占める割合は，さらに大きくなり，全収入の7-8割を占めるようになった。まさに渋沢の期待した通り，収入の大半はこのような形で自然に入ってくるようになったのである。あえて有志，会員，皇室などから苦勞して義援金を集める必要はなくなったのである。

このような拠金，配当金，利子を中心とする収入によって慈恵会の資産（公債，株券，預金）は明治40年を境にして急激に蓄積していった（図3の下図参照）。そしてその資産蓄積に比例して年毎の支出も増加していったことは言うまでもない（同図）。また図3の上図は病院の外来患者数と入院患者数の経時変化を示したものであるが，これまた慈恵会の設立を境にして両者とも急激に上昇している。つまり資産に余裕ができて，外来患者，入院患者用の支出（医療費）を増やすことができたためである。入院費が潤沢になったためベッドも全部使えるようになった（つまり満床になった）。

また同じ理由によるのであるが，明治22,3年ころから17,8年間途絶えていた施設拡充（増改築）も慈恵会設立に見合って再現し，その数年間に生理学教室（55坪），図書館（20坪），雨天体操場（70坪），解剖学教室（60坪），

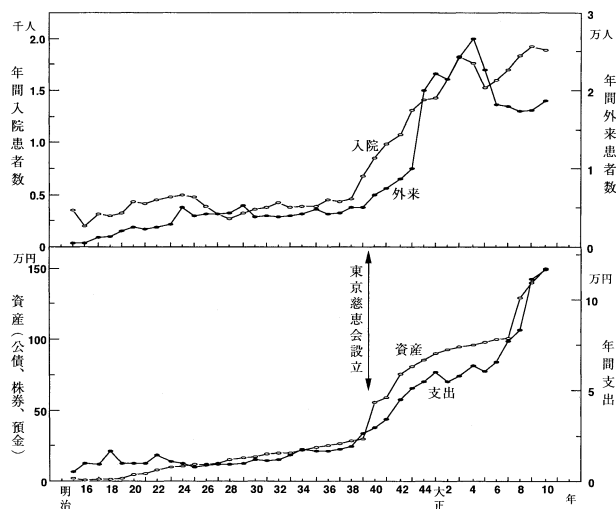


図3. 慈恵病院の資産、年間支出、年間外来患者数、年間入院患者数の経時的変化

資産と年間支出は下図に、年間外来患者数と年間入院患者数は上図に示す。この外来患者数とは年間に2度以上外来を訪れた患者数のことである。1度だけの患者を含めると変動が大きすぎるためである。この図は東京慈恵医院報告ならびに東京慈恵会医院報告の数値から作図した。

第四号病棟（70坪。これでベッドは全部で140になった）、病理学・細菌学教室（160坪）などが次々と建設された。

東京慈恵会医院医学専門学校は大正10（1921）年に東京慈恵会医科大学に昇格するが、これらの諸施設はその昇格のための条件になったものと考えられる。つまりこれで大学らしい教育が可能になったのである。その意味では慈恵会の設立は慈恵医学校の歴史にとっても高く評価されるべきであろう。また設立いらい昭和5年までながく同会の副会長としてまた財務主任として病院の新築、改築、医学校の充実に精力を注ぎ続けた渋沢の努力にたいしては格別の敬意を表すべきであろう。その象徴と思われるが、この医学校の卒業アルバムにはいつもその巻頭に慈恵副会長・渋沢の写真が掲載されていた（写真掲載は渋沢が亡くなる昭和6年まで20年以上も続けられた）。

## 5. 東京慈恵会と渋沢栄一の思想

社団法人・東京慈恵会の設立によって慈恵病院の経済基盤はこのように大きく変わったが、しかしそれまでこの病院を支えてきた思想的基盤はいささかも変わることなく、それは伝統として継承された。

伝統の一つは、云うまでもなく慈悲、仁愛にもとづく濟生救民の思想である（それは「慈恵会の目的」に「本会は貧困にして医薬を得る資力なき病者に施療するを目的とす」とある通りである）。その二つは、病院を運営する方法が有志共立的であること、つまり富める有志の拠金によってまかなわれることである。有志者の主たる構成は、医師集団から華族婦人、皇后へ、さらに（慈恵会設立によって）資本家、華族に変遷したが、その中心に有志共立の思想があったことは変わることがなかった。

先に見たように、渋沢はかなり初期から慈恵病院の運営にかかわってきたのであるが、それは渋沢のどのような思想が慈恵の伝統思想に共鳴したからであろうか。ここに少し考えてみたい。

### 慈悲心

渋沢栄一は、明治7(1874)年から92歳で亡くなるまで56年間、東京養育院の院長を勤めた。養育院は親のない不幸な少年少女や身寄りのない老人を養う社会事業団体であった。明治初期にはまだ「社会保障」とか「福祉法」などという制度もないし、またそういう観念すらなかった時代である。そんな時代に養育院を設立したことは彼の特質の一つとして注目すべきであろう。

この特質のかなりの部分は彼の母親からきているように思われる。彼の母はまことに慈悲深い女性で、気の毒な人がいると黙っていられず、だれかれなく物を与えたり手伝ってやったりしたといわれる。ある時、共同浴場に癩患者の女性がいってきたとき、入浴者は気味悪がってみんな逃げだしたが、気の毒に思った彼女はその患者と一緒に入浴し、背中まで流してやったという話がのこっている（ために親類から嘲笑されたといわれる）。

渋沢には、この母の慈悲心が社会組織という衣を着て遺伝したようなところがあり、この心が慈恵の創立の精神とどこかで共鳴しあったのではないだろうか。そしてこの母の慈悲心は（先に見たように）孫、ひ孫の代にまで影響し、渋沢家全体がこぞって慈恵医院婦人会や慈恵会の仕事に参加していったものと思われる。

渋沢が高木兼寛と知り合ったのは明治17、8年のころと思われるが、とくに親しくなったのは同27年に高木に癌を手術してもらった時からであった。渋沢は27年と37年の二回、生死にかかわる大病をしたが、その度に高木によって救われた。渋沢は高木の医術の確かさをいつも賞賛していたが、これについては次のような回想がのこっている。

「明治27年11月、面部にがんを患い悩む。とくに先生（高木のこと―筆者）をわずらわしたるに、悪性なればとて、執刀手術をうく。多くの医師の再発を恐るるなかに、先生は根治したることを声明せられしが、果たして今日にいたるまで再発することなかりき。次いで37年5月、中耳炎を病み、さらに肺炎を併発す。重体なり。家族知友ことごとく憂い、予もまた生を望むの難しきを想う。…このとき先生は断固としてこれを斥け、病気の必ず回復すべきを確言せられたり。このときも果たして快癒して、いまさらに先生の明断を感謝したりき」と。

高木の、自分の医術にたいする自信もさることながら、渋沢にたいする思いやりや励ましの気持ちも十分伝わってくる（「病人を診る」人間的力量の確かさをみる想いがする）。渋沢は、高木にたいしては常に先生と尊称して特別な敬意を払っていたというのが、それをもっともな気がするのである。

## 論語

高木が英国から帰って有志共立東京病院をつくったころ、東京には順天堂のような名医による立派な病院はいくつか作られていたが、しかし貧しい庶民にとってはそれは近づき難い存在に過ぎなかった。高木はある病院の開院式で（こともあろうに）「これではお金のある者だけがくる、金儲けのための病院ではないか」と言って周囲を驚かせたというのが、彼はもともと貧しい病

人から金を取り、医を私的利益の手段にすることには気が進まなかった。彼はなによりもまず多くの庶民のための公利公益の病院をつくらねばならないと考えた。そしてその意図のもとにつくられたのが慈善病院・有志共立東京病院であったのである（そのころの高木は英国のキリスト教的人道主義の影響が強かった）。

一方、渋沢が役人をやめて実業の世界に入ったとき（明治6年ころ）、彼がまず考えたことは事業の経営には道義の観念が必要であるということであった。彼は少年時代から愛読した「論語」を道しるべにして事業をすすめたいと思ったのである。これが彼のいわゆる「道徳経済合一論」であり、くだいていえば「論語とソロバンの一致」ということであった（実際に彼には「論語と算盤」という著書がある）。彼の「道徳経済合一論」なるものはこのように儒教精神（武士道精神）に由来するものであり、したがって彼の商法はまたしばしば「士魂商才」とも云われる。

渋沢によると「真の事業を営むは私利私欲でなく、すなわち公利公益である。公の利益になることを行えばそれが一家の利益にもなるのである。余の主義はすなわち利己主義でなく公益主義である」。『物質文明の進歩は、ややもすると仁義道徳と相容れぬことが多い。その弊として極端なる利己主義となり、ついに道徳と経済が乖離して文明の退歩を促すおそれがある。実業家の中には利益さえ得れば仁義道徳は必要ないと心得る者があるが、これは甚だ誤った考えであり、結局は信用を失い、経済の発達を阻害することになる。警戒すべきことである』という。

かつてアダム・スミスは「個人個人が自分の利益を追求しさえすれば、あとは『神の見えざる手』によって社会全体の調和と利益がうまく保証される」と云ったことがあったが、渋沢の場合には、この「神の見えざる手」に代わって論語というむしろ人間的なものが必要だと考えたのであろう。

渋沢の生家は庄屋の階級であり、彼らは士族に準ずる階級でありながら士族より経済力があり、さらには士族と同様、代々本（儒学）を読んだ階級である。また村落の管理者として農村の実状にあかるく、農民を代表する意識が強い階級であった。渋沢がしめす庶民の利益、公益のためには舵をとらね

ばならぬといった気概は、幼少の頃よりこのような環境で学んだ儒教からきているように思われる。

彼は息子たちによくこんなことを云ったという。「夏の夕方 蚊がたかってくるように、用のたかってくる人にならないといかんよ。役に立つ人には用がアトからアトから追い掛けてくる。役に立たない人は用の方から逃げていってしまうものだ」と。

## 合本法

渋沢は慶応3(1867)年、徳川昭武に随行して渡欧し、西欧の近代的産業設備や経済制度を学んだ。とくにパリでは銀行家・フロリヘラルドから金融制度について多くの知識を得た。フロリヘラルドによると、このパリには多くの銀行や会社があり、大規模な事業をいとなんでいるが、それらの土台は大衆から集められた資金であるという。そして各人の出資額がたとえ少なくても集まれば巨額になり、それを巧みに運営すれば、大きい利益をあげ、それを出資者に配分することができるというのである。そしてこれが株式会社というものであると教えられた。

渋沢が日本の近代化のために果した役割は、なんといってもこの株式会社の思想を実業界に導入したことであった(当時、彼はこれを株式会社といわずに合本法と云っていた。小資本を合わせて大資本にするという意味である)。彼が最初につくった本格的株式会社は第一国立銀行であった。そしてこれは日本最初の銀行でもあった(彼は明治6年から40余年間その頭取を務めた)。

この合本法に反対したのは岩崎弥太郎(三菱の創業者。上述の弥之助の兄、久弥の父)であった。彼によると「合本法は船頭多くして船山にのぼるのたぐいだ。事業というものは巨大な利益を独占できるからこそ妙味があるのだ」というのであった。そして「会社ノ利益ハ全ク社長ノ一身ニ帰シ、会社ノ損失モ亦社長ノ一身ニ帰スベシ」(社則)としていた。



そして実際に市場競争で有利なのはこの岩崎弥太郎のタイプであった（カリスマ的ワンマン経営のほうが危機において威力を発揮するのである）。渋沢はこのため同じ業種の競争ではしばしば岩崎に負けた。しかし彼はそれを少しも意に介することはなかった。自分は正しい倫理思想でことを運んでいるのだという自負があったからであろう。後年彼は息子たちに「俺がもし一家のためだけに富を積もうと思ったら、岩崎や三井に決して負けはしなかったろうよ。（ここで笑いながら）これは決して負け惜しみではないぞ」と云っていたという。彼は、独占的な資本家になろうとせず、むしろ日本資本主義社会のプロモーターの立場に自制したことに誇りをもっていたのではなかろうか。

渋沢の合本法と慈恵病院の有志共立の思想とはたしかに共通するところがある。この病院の資金の提供者は各時代によって多少異なるが、東京慈恵会医院のそれは（渋沢らの勧誘によって）慈恵会を構成した 1,000 人近い有志出資者たちであった。考えてみると英国のエーランドから早矢仕有的、松山棟庵を経て流れてきた有志共立の思想とフランスのフロリヘラルドから学んだ渋沢栄一の合本法の思想が東京慈恵会において合流したことは大変興味深いことである。

経済のボーダレス化が進み、市場競争に勝つことのみが正義であるといったイデオロギーが世界をばっこしている現状からみると、公益とはいえ何の利潤も生まない慈善病院に 1,000 人もの有志が金を出し、それを運営したという事実は何とも不思議な気がするかも知れない。

しかし、今まで世界をばっこしてきたこのような（市場主義の）イデオロギーもここにきて大きな壁（所得格差の拡大）に打ち当たっているのも事実である。ひどい格差社会を、つまりごく少数の富裕層と多くの貧困層を生みだしてしまったのである。現代が直面しているこのような市場主義の欠陥に対してもやはりかつて慈恵会が示した資産の「贈与」「再配分」といった倫理的思想が大きな緩衝能になるのではないだろうか。この倫理的思想が「仁（同情心）義（公正）」という儒教的、武士道的精神からきていることは言うまでも

ない。

最近、佐野眞一はその著「渋沢家三代」のプロローグの中で、このような所感をのべている。「渋沢家は、戦後、GHQの財閥指定を受けたが、その後の調べでGHQから財閥指定の解除を申し出られた、つまり『財なき財閥』であったのである。…渋沢家から数多く輩出したのは、実業家につながる血統ではなく、むしろ学者や芸術家たちだったのである」と。

そして佐野は渋沢家の多くの学者や音楽家などの名前とその業績を挙げたのち、このように結んでいる。「この多士済々な人材を輩出した血統をたどることで、近代日本史のある断面を素描することができるのではないか。それは拝金思想に冒されるはるか以前の生き生きした日本人の息吹きを伝えることにもなるのではないか。そして同時に、世紀末の閉塞状態に陥り、すっかり自信を喪失している現在の日本人に、忘れてしまったプライドというものをわずかながらでも回復させることができるのではないか」と。

そういえば本小論で筆者がのべたかったのも結局のところはそのことだったのかも知れない。

#### 参考文献

- 1) 東京慈恵医院編。東京慈恵医院第1報告—第21報告 1888-1907.
- 2) 東京慈恵会編。東京慈恵会医院第1報告—第39報告 1908-1945.
- 3) 東京慈恵会編。東京慈恵会総裁威仁親王妃慰子殿下御事跡。東京慈恵会, 1926.
- 4) 高木兼寛。欧米視察談。医海時報 1906; 645: 1049-51, 646: 1075-6, 647: 1094-5, 648: 1111-2, 649: 1130-1, 650: 1151-2, 651: 1170-2.
- 5) 高木兼寛。北米視察談。成医会月報 1906; 297: 27-33.